

獅子王の如き心

加藤智學

日蓮聖人の佐渡御書の中に、『強敵を伏して始て力士を知る惡王の正法を破るに邪法の僧等が方人をなして智者を失はん時は、獅子王の如くなる心を持てる者必ず佛になる可し、例せば日蓮が如し。』と示されて有る。

實際今日の様な世の中に生れて健氣な心を持たぬ者は、我知らぬ間に足を踏み外して暗闇の底に沈んでしまはなければならぬ、心長閑に日を暮すと言ふのは四歳か五歳までの事で、幼稚園へでも通ふ様になれば、種々の點に就いて、小さい胸の中にも競争と言ふ事を覺える、是れが學校へ通ふ様に成ると、大は學期毎の試験の點數から、小は毎日の辨當の菜にまで一として、幾分かの競争を伴はぬ者は無い、恐しい程に烈しい世の中の有様である。

然し學生生活をして居る間は競争と言つても知れた者で有るが、一度足を世の中へ踏み出すと、會つて、教場の窓から眺めた世の中とは、全く異つて、鬨聲堅固と言ふ經文の言葉が實にもと思ひ當る事で有る、此の烈しい中で競争を續け乍ら、望む事の十分一も達し得ぬ中に生涯の大部分は經つて仕舞ふ、詩人クーバーの隣りの家の狗が兎を追ふて山路を走る間に足を滑らして谷合に落ち岩に頭を碎いて死んだ、クーバーは此の狗の墓に詩を題したが、其の中に、

獲んが爲に汝は走れり

而も汝は得ずして死せり

自ら顧へば弔ふ我等も

汝と異なる所無きかな

こ、言つて居る、眞に其の通である、斯く複雑極り無き世の中に立つて心と心と相同じからぬ我々が、共に居り共に交り共に競争を續けて行くので有る、此處に絶えず衝突が起り矛盾の生ずるのは當然の事で有る、而も人々の欲望は此の衝突矛盾に刺激されて愈募つて來る、何事にも只自身を中心にして考へる事は『我欲』とか『利己』心とか色々の名を附けられて、道德論者の強い非難を受けるので有るが、誰でも始から烈しい自己中心の思想を懷いて居るものはない、一茶の句に、『始めから人刺す草はなかりけり、』とある如く、強い周囲の刺激や壓迫を受けて自然に主我的性質を作り上げる者が多いので有る。

兎にも角にも苦しい世で有る、我々は餘程心をしつかり持つて居ないと、自暴自棄の外はなくなるのである、石に吠えつく狗は決して猛いのではない、弱くて憶病で有るから投げられた石に吠えつくので有る、世には自暴自棄の餘りに恐ろしい罪を犯す人が有る、是は弱い心と弱い身体の生み來る罪で有る、自分は徳川時代の末期に行はれた俗謡を讀んだ中に、

金が欲しけりや泥棒さんせ、首の無いのも意氣なもの。

と、云ふのが有るのを見て何とも形容の出來ぬ、寂しい感に打たれた、自分の生命を失ふ事を『意氣なもの』と冷笑するに至つては、自暴自棄の行止りで有る、斯う云ふ俗謡を生んだ世の中が悼ましくて無らぬ、然し斯うした心で生きて居る人は、今の世にも決して少くは無からう、斯う言ふ中に立つて自分の足元の道を眞直に踏んで行こうとすれば、非常な勇氣を要するので有る、我々は有らぬ迫害を押し退けねばならぬ、而して常に我と我が心を叱咤し鞭撻して失望せぬ様、自棄にならぬ様妥協的、便宜的、の性質を帯びぬ様飾らず枉げず努めねばならぬ、陽明の所謂『心中の賊』と『山中

の賊』とを併せて退治せねばならぬので有るからウツカリしては居られぬ筈で有る。

斯くの如くに考へれば、我々の一身の責は大である、随つて我々の闘はねばならぬ戦は又大である弱ければ斃れてしまう、斃れては一身一家の爲乃至他人の爲にならぬ、弱いのには罪の元である、弱いのには多くの惡を生む者である、獅子王の如くなる心を持てる者が佛に成ると云ふのは、至言で有る、獨り日蓮聖人の當時に於て、然る事ならず、今後の世に於て益々然りと考へなければならぬ。

人の人たる價値は、學問や經歷や身分では定まらぬ事を知らねばならぬ、我が足で地を踏んで立とう、我が眼で見て我が頭で考へて進まう、何物が崩れかゝつて來ても決して動くまいと、斯う決心する事が第一に肝要で有る。

以上

土牢を訪ふ

菊 田 雄 壽

江ノ島電車は暑い海岸を濱風に吹かれながら鎌倉を指して進み、稻身ヶ崎、極樂寺を過ぎて長谷の停車場に着いた、

私は此處で下車して路を光則寺の方へ取つた、太陽は焼きつく様に照らす、程なく長谷觀音の堂を過ぎて、左に折れた小路を辿ると、光則寺の正面に出る、流石に何處となく靈蹟らしい一種云ひやうない嚴肅な氣分に、打たれた。